

患者さん・歯科医師・看護婦の関係 ～看護婦は歯科医師の良きパートナーになれるか～

看護婦長 笠井 美香子



昨年12月に行われた新潟県看護研究会で、聖路加看護大学の植村研一教授から、「これからのチーム医療における望ましいコミュニケーション」というテーマで特別講演がありました。

私は、平成6年2月より当病院に勤務していますが、当初は、「なぜ私は看護ができないのか、歯学部附属病院だから？外来だから？」と悩んでいました。その当時の私の頭の中での看護とは＝患者さんのそばにいて、見守ること、そして患者さんのニーズを把握し援助することだったので、でも、そのことは月日が経つにつれて、「自分の考え方で、気持ちの持ち方で、歯学部か否かではなく、また病棟か外来かではなく、患者さんがそこにいて看護はできる。それは患者さんと接する（距離は問題ではない）ことで…」と考えられるようになりました。でも、勤務当初になぜそのような思いを抱いたのか？、植村先生のお話を聴きはっきりとしました。医療チームの連携の必要性を再認識し、また今後、医療従事者は患者さんや家族の方に対してどのように接して行くべきかを考える機会を得ることができました。その時の講演の内容からいくつか抜粋し、以下に紹介したいと思います。

<医師中心主義から患者中心主義へ>

植村先生がアメリカに行かれた1960年代は、アメリカの近代医学が大転換をした時期で、DOS (Doctor Oriented System＝医師中心主義) から POS (Patient Oriented System＝患者中心主義)

に切り替わっていった頃でした。

それまでの医療は、あくまでも医師がトップに立って、その下に薬剤師や看護婦、検査技師、その他の医療従事者が控えていて、これらの人たちの援助を受けて患者さんの診断や治療を行って来ました。

そして、医師は患者さんに対し、病人ではなく病気の面倒を診ていたわけで、この時代の医療は、医師中心主義であり、そして病気を治せばいいという病気中心主義 (DOS=Disease Oriented System) でした。

ところが、1960年になるとアメリカの国民がだんだん目覚めてきて、偉いのは医師ではなく患者さんであって、患者さんの面倒を医師とコメディカルの人たちと一緒にチームを組んでみるようになりました。“パラ=para:わき役”から“コ=co:なかよく一緒に”というようになったのです。

1970年以降になると、健康な人であっても健康管理をしなければならないのではないかとということで、一人一人を医療の対象とするようになってきました (国民中心主義: POS=People Oriented System)。ところが、日本では依然としてDOSのままですから、アメリカに30年は遅れているといえるのではないかとということでした。

<インフォームド・コンセントということ>

“インフォームド”というのは、「医師が患者さんに情報を提供した」という能動形の文法ではなく、「患者さんが情報を提供された」という受け身の英語です。ところが、「説明と同意」と翻訳する

と、医師が説明して患者さんが同意を与えましたという能動形に解釈されてしまいます。だから、「私は説明したんだからいいじゃないか」ということになってしまいます。ほんとうの意味は、「患者さんは情報をきちんと提供されて理解した」ということなので、「納得と同意」とするほうがよかったのではないのでしょうか。

患者さんに説明するとき、裏表の2つのやり方があります。例えば、「あなたの肺癌の治療をする場合、手術では20%の死亡率ですが、うまくいけばほぼ確実に10年は生きられます。それに対して放射線では最初の5年間の死亡率は2~3%ですが、10年間だと40%の死亡率になります。」を、中身を変えないで裏から言うこともできます。「あなたの肺癌の治療をする場合、手術ですと80%うまくいき、そうすればほぼ確実に10年は生きられます。それに対して放射線療法では最初の生存率は97~98%ですが、10年間だと60%になります。」つまり前者は“死ぬ”ほうに脅して、後者は“うまくいくよ”とおだてる。数字的には同じことを言っていますから、どちらを言ってもいいわけで、これは医師の裁量権です。

他にも、コミュニケーションやカウンセリング、患者さんや家族のこころを受け止めるということ、面接技法等についてのお話がありました。

今までの私が“看護”していたつもりの中身は、本当に患者さんを中心に考え行われていたことだったのだろうか（少なくともの自分はそのつもりでいたが…）、今一度ここで立ち止まり考えたい。

POSの時代の医療・看護は、それぞれの職種が単独で行うことは不可能であり、医師・歯科医師とコメディカルの人たちと一緒にチームを組み患者さんや家族に接していかなければならない。

看護婦はコメディカルの人たちの中で最も患者さんや家族に近い存在である。そういう意味では患者さんや家族についての沢山の情報を医師・歯科医師に提供できなければならない。

私たち看護婦は、患者さんや家族のこころを理解しようと、カウンセリングやコミュニケーションの研修があれば積極的に参加している。また、患者さんを全人的に捉えるためにいろいろな看護理論を勉強し、その結果オレムの看護理論に基づき看護を展開しようと努力している。これからも看護婦は、歯学部附属病院において歯科医師の良きパートナーとなり得るよう努力していく必要がある。そして、歯科医師とカウンセリングやコミュニケーションの研修会などを行い、患者さんや家族のこころを守るように協力し合えるようになりたいと考える。

【引用参考文献】

植村研一；医療におけるコミュニケーション=医療者はどう患者・家族と接するべきか，ライフプランニングセンター 健康教育サービスセンター，1995。

植村研一；医療人の情意教育の現在と将来，日本製薬工業協会教育研修委員会編集，薬業時報社，東京，1998。